

つて見つめてゐる。漸く七十メートルか八十メートル沖に出た途端、敵機ハリケンが川の上すれすれの低空で飛んできた。「もう駄目だ、覚悟しろ」と互いに励ましなが、それでも最後まで一生懸命渾身の力を振り絞つて漕いだ漕いだ。

運良く神は、我を助け給ふたか、敵機ハリケンは現地人と思つてか翼を交互にはばたかせたが、そのまま行き過ぎ去つた。「それ、今だ」とばかり死力を尽して漕いで目的の対岸に無事到着することが出来た。この時の喜びは到底筆舌に尽くすことは出来ない。無事の時の喜びは到底筆舌に尽くすことは出来ない。無事傳令の任務を果たし、夕方までジャングルで休養し、薄暮になつて再びイラワジ川を渡つて中隊に帰つてきた。

このときの中隊長の喜びは一通りではなかつた。

「でかしたご苦労、お前等の功績は必ず覚えて置くぞ」と前線にてなけなしの貴重品ジャワ製の煙草「興亜」とサイクルを一人に三個づつ与えて涙を流し手を取つてよろこんで呉れた。

あ、この稻垣中隊長も二十年八月十四日、日本の敗

戦も知らず護国の鬼と化し、我々が決死の伝令により応援を求めた歩兵第十四部隊の勇士等も、その夜の戦闘で玉碎し、ビルマ戦の華と散つた。

終戦後、早くも何時しか四十六年、現在の若者達は物質的にも何不自由なく平和で自由主義を謳歌し、あの苛烈を極めた大東亜戦争の傷痕を忘れんとしている。はなはだ遺憾千萬ではある。今次大戦中、陸戦において特に凄絶を極めたビルマの転進作戦に従軍し、奇しくも生を得てこの手記を綴り得ること、誠に転た感慨無量である。

白骨街道

滋賀県 田中善輝

まえがき

東洋に植民地を持つ国々を追い出さない限り東洋永遠の平和は無いと教えられて育つた。陸海空の精鋭は国民の期待を裏切らず陸に海に大いなる戦果を挙げて

いた。国民は戦勝に酔い血気の若者は軍人に憧れ、続々と陸海空軍に志願した。満十七歳になった私も徴兵検査を待ち切れず陸軍を志願し合格した。君の御為、国の為との大義名分など無かった。志願したのは強者に憧れ戦場へ行きたかっただけである。野戦の労苦など知るよしもなく、ビルマ派遣軍の一兵士として従軍したその記録である。

出征

「あ、堂々の輸送船、さらば祖国よ栄えあれ。」
感極まって唄い出す戦友達、水平線の彼方に今消え去ろうとする故国の山影をじっと見つめて、生きて再び祖国の地を踏むことはできないであろう。自分達を待っている本隊は今インパール平原で悪戦苦闘していることを兵等は良く知っていて、すでにその覚悟はできていた。

思えば桜花の蕾がほころび初めた昭和十九年四月一日、敦賀の中部第三十六部隊に現役兵として入隊、ビルマ派遣祭第七三七二部隊の要員として連日訓練を重ね、一期の検閲を終え、お世話になった教官や先輩将

兵に送られて懐かしの営門を後にして来たのである。今、玄界灘の荒波を分けて進む輸送船上に祖国の繁栄と家族の無事を念じつつ心の中で別れを告げていた。

海空戦

甲板に全員整列、出陣式が勇ましく挙行され、銃弾の配分があり、戦場に来たという実感が身を引きしめた。護衛艦六隻輸送船三十隻の大船団であった。そして数時間後、台湾沖で戦場という現実遭遇しようとは誰も予想しなかった。

美しく輝く南十字星を眺めている時、突如、船首近くに見上げるほどの水柱が立ち、瞬間大音響が起り、爆風が甲板の兵を薙ぎ倒した。その瞬間、黒く大きな機影がマストすれすれに飛び去るのが見えた。

護衛艦は火だるまになって空に向け持てる砲火を浴びせていた。彼我の銃砲火は百雷のごとく鼓膜を叩き、その曳光弾は星空を彩り、そこに展開された修羅場的光景は新兵達を恐怖のどん底に突き落した。

茫然として立ち上がった時には、全弾投下した敵機

は付近の海に遊弋中の味方潜水艦にこの獲物をバトンタッチして悠々と飛び去っていった。海空に静寂は戻ったが、今度は敵潜の攻撃を受けることになり、恐怖の海にジグザグの航跡を引きつつマニラ港へと全速力で南下していた。熾烈を極めた海空戦の彼我の兼った損害などはなぜか兵には知らされなかった。

地獄の船旅

マニラからシンガポールへ向け出港した輸送船は、数千の兵員を詰め込み立錐の余地もなかった。さらに赤道直下の炎熱は甲板を焦がし、正にこの世の地獄であった。地獄の明け暮れに弱兵は熱病に倒れ、水葬という名において、夜毎、鮫の待つ海へ次々と消えていった。昼夜を問わぬ敵潜の魚雷攻撃をかわすこと幾度、身の縮む思いでシンガポールに無事入港した。兵等の疲労はその極に達し、戦友の肩にかかり上陸したが大半は病人であった。

ジョーホールの兵站病院は廊下にまで病兵が溢れ、そこに甲斐甲斐しく働く白衣の天使は、久しく接することもなかった日本女性のやさしくて尊い姿だったので

ある。

兵站部隊への転属

中部ビルマの高原地帯シャン州のタウンゼーから中国国境の町シボウの線に兵站線を張り、通過部隊のための宿舎の建設、食料の給与等が主な任務であった。

昭和二十年に入るとビルマ最前線は有力な連合軍の攻勢に逢い、総崩れとなり、マンダレーもまた敵の手中に帰した。ロイレムにあった第五輸送指令部とわが部隊本部は敵の空爆で壊滅し、副官初め多数の兵を失い、ここを捨てて退却した。連合軍の大部隊は海空より要衝メークテイラを攻略、怒濤の勢いで首都ラングーンへ迫っていた。シャン高原に展開していた日本軍五万余の退路は完全に断たれ敵の包囲下にあった。これを突破するには千メートル以上の山々が連なる山岳地帯を越えるしか道はなかったのである。

退却 モチ高山越え

四月も半ば雨季の近づく南ビルマのモチ高山越えが始まった。一握りの米と靴下一本の岩塩が食料のすべてだった。植生物、食える物は何んでも口に入れた。

水筒はいつの間にか竹筒に変わり、飯盒のみが腰にぶら下がっていた。疲れ果てた兵達に一番恐ろしい敵はマラリヤ、赤痢等南国特有の病魔であった。猛獣、毒蛇の住むジャングルに、険しい山路、病魔の餌食となり次々に倒れていった戦友達の死臭にも馴れて、屍の隣で露営の夢を見ることもしばしばであった。

非人同様の姿で山をさまよい、赤錆の銃も菊のご紋章があるが故に離さず、数発の銃弾と一個の手榴弾のみが日本兵たることを証明していた。七月初め泰緬国境の町コーカレーに着いた部隊は、全員が無遊病者のごとくでしかも兵員は出発時の半数近くに激減していた。過労が故にこの町で終戦を迎えるまでになお十数名の兵が病死した。

終戦

ニーカレー近郊の草原において英兵の機銃に囲まれて武装解除を受け、ムドンの捕虜収容所に送られ、敗れた故国をしのびつつ労役に服しながら迎え船の来るのを毎日毎日待っていた。

帰国と復員

英国が手配した復員船リバティ型一万トン級の船倉には、歓喜した兵達が夢にまで見た故国へ今戻りつつあった。沖縄戦に散った人々の霊に黙禱を捧げて、二日後の朝、水平線上に祖国の山影が見えた時は、誰の目にも涙がとめどもなく流れた。

昭和二十一年七月九日、呉の大竹港に上陸、故国の土を踏みしめて復員帰郷した。

あとがき

戦なき世の幸せな日々の暮らしに感謝致し、戦野に倒れた多くの戦友達に思いを馳せつつ、ただただ冥福をお祈り致します。

ビルマ通信隊

愛媛県 山本 義男

昭和十七年一月十日、丸亀西部三十八部隊師団通信隊へ入隊、お国のためと勇んで出征したが、家に残る病床の祖母、盲目の父、今後、私に代わって家庭の面